

誌 香  
能古博物館だより



平嶋 信「野河内秋景」油彩F10号

多々羅義雄の最初の師

画家 平嶋信のこと

谷口 治 達

本誌創刊号(平成元年九月)に私は「洋画家多々羅義雄のこと」を書いた。能古島が生んだ唯一の本格的洋画家であり、能古博物館にはその遺作品が多数収蔵されている。

その多々羅の最初の師平嶋信(ひしまたまご)については、人も作品も今日ほとんど知られていない。その名は久留米が生んだ天才画家青木繁の評伝の最終部に僅かに出てくるだけである。

すなわち——明治四十三年(一九一〇)夏、二年前から筑後、佐賀方面を放浪中の青木繁が佐賀県小城町に現われた。画友平嶋を頼ったのである。平嶋は当時小城中学(現小城高校)の美術教師だった。町を貫流する祇園川沿いの平嶋宅にも一時滞在した。



平嶋 信 自画像 油彩F4号

平嶋宅にはその時二人の同居人がいた。一人が十六歳の多々羅少年で、平嶋の内弟子として絵を学び、上京しての美術学校進学に備えていた。その折の青木と多々羅の交渉は創刊号に紹介した。

もう一人は平嶋の姪で十八歳のツギである。なかなかの美人と伝え、それを裏づける写真が一葉、平嶋家に残っている。

たちまち青木は恋し、関東に愛人福田たねと一子幸彦がおりながら、ツギに求婚、平嶋も断わりきれぬ状況であった。

ところが折から青木は肺結核が悪化、咯血し、福岡市の九大病院の診察を受け、東中洲にあった松浦病院に入院した。同年冬、ツギが見舞っており相愛関係だったと推量できる。

能古博物館だより

しかし翌四十四年三月、青木は二十九歳に満たぬ無念の人生を閉じて、ツギとの縁談も消滅してしまった。

ツギは平嶋の長兄の娘で両親を失い平嶋を親代わりとして結婚に備えていた時、青木が現われたわけで、青木の没後、小城出身の弁護士に嫁し、佐賀で幸福な家庭を築いた。

平嶋は小城における青木の奔放な行状の跡始末役となった。結果的に青木の絶筆となった「朝日」を校長に頼んで小城中学に購入してもらい、その代金を旅館代など青木の借金返済に当てた。「朝日」は今日も同校の所有である。ここまでが青木の評伝と関わる部分である。

平嶋は青木繁とその画友坂本繁二郎より三歳上、明治十二年(一八七九)十二月二十五日生まれ、本籍は福岡市早良区西新町二八番地である。中学修猷館を四年修了後上京し、小山正太郎の画塾不同舎に入門した。小山門下には修猷館出身の吉田博があり、中村不折、満谷国四郎と並んで三羽鳥と呼ばれていた。吉田を頼っての入門と思われる。



平嶋 信「柳川風景」(1956年) 油彩F 8号

だが入門年次は定かでない。青木は明治三十二年入門一年在籍、翌年東京美術学校選科に転じた。坂本は明治三十五年、青木の愛人福田たねは三十六年入門である。坂本は後年、平嶋の個展(後述)のために寄せた文に平嶋のことを「同塾の先輩」と記している。

青木は東京美術学校入学後も不同舎に繁々と出入りしていたらしく、学費にゆとりがあった平嶋はよく青木に金や画材を貸していたということである。

白馬会展に「海の幸」を発表するなど青木の活躍ぶりに



平嶋 信「港」油彩F 12号

目を見張ったことだろうし、また福田たねとの人目をはばからぬ恋も眼前にしたと思われる。

明治三十七年(一九〇四)不同舎は太平洋美術学校となり坂本も平嶋もそこで学んだ。卒業後平嶋は九州へ帰り小城中学教師となった。能古島出身、画家志望の多々羅義雄がなぜ小島の平嶋の門を叩いたか不明確だが、平嶋の郷里西新町で多々羅家の家人がその名を聞いたと想像される。

平嶋は青木が来る前、明治四十三年春、福岡市で開かれた九州八県連合共進会の絵画展で最高賞を獲得している。地方においては並みでない実力の持ち主であった。

大正九年(一九二〇)ごろ小城中を辞した平嶋は福岡市に帰り大陸渡航を図った。一度中国を巡遊ののち大正十三年、家族と共に大連に移住、ただちに画塾大連洋画研究所を設立した。南満工業専門学校などで教鞭もとり、関東州庁の嘱託として教科書づくりに携わった。

平嶋の二女大神敏子さんの話では、大連では本土の美術展に全く出品せず、専ら満州国展に出し、入選作は毎年新京(長春)などの会場で売れてしまい自宅に戻ることはなかったという。

大連では有力画家として尊敬され、満鉄はスケッチ旅行のためにと全線パスを提供、また関東軍は平嶋の制作上の希望に応え、モデルとして正装の兵と看護婦をアトリエに派遣したこともある。「戦傷癒えて」という百号の作品が描かれた。回復した兵士を前戦へ見送る看護婦の絵で、平嶋が描いた唯一の戦争画だそうで、写真だけが残っている。

大連洋画研究所は戦争中まで盛況で、平嶋は正規の美術学校への昇格を目指し準備を進めていた。終戦でその夢は破れ、大連時代の作品はほとんど行方不明となったまま、昭和二十二年(一九四七)二月、福岡へ

引揚げた。その時六十八歳、故国では無名同然、そして戦後の厳しい生活環境の中で再出発、絵筆をとり直すことになった。

早良郡金武村金武(現西区)に住んだ平嶋は各地へスケッチの足を伸ばした。本来風景画家で、大連時代も満州を歩き回り何百点も描いたという。新作が溜まり始めると周辺から個展開催を勧める声が高まった。

国内画壇と没交渉だった平嶋だが若干の友人がいた。石川寅治、楢原健三、小杉放庵らである。石川は画塾不同舎の先輩であり小杉は同輩である。楢原は大連旅行で知り合い文通を重ねた。彼らと共に多々羅義雄も旧師の個展の計画をきいて激励の手紙を寄せた。昭和二十八、九年ごろ、個展を目指して大いに制作が弾んだ。

個展は昭和三十一年(一九五六)五月十一日から十六日まで福岡玉屋七階ホールで開かれた。福岡市長小西春雄、九大教授牧川鷹之祐、玉屋社長田中丸善八らが発起人となり「平嶋信画伯喜寿記念洋画展」と銘打ち後援会も組織された。

坂本繁二郎と小杉放庵が案内状に推薦文を書いた。かつての不同舎の両画友は今や国内画壇の巨匠に列し

ていた。

坂本は「画壇的表面には殆んど無関係に黙々画道精進……生涯の沈黙を破って今回其作品を発表さるると云う……氏の画面は素直・純真・自然・必然、そう云うよさが、見る者を飽かず引

付け、其喜びをしみ透るようには与えるのである

う……」と記している。

小杉も「不同舎画塾の同期生を数える」と、

高村真夫、青木繁、萩原守衛、森田恒友、みなすでに過去に入りました。坂本

老、平嶋老と私が残って居る。お互に手を取って生きていたなあと一笑

するところ……半世紀以上の画歴、芸術界はいろいろに変転するが、

わが平嶋老は右を見ず、左を見ず、静かに独自精進の道を歩み来り、こ

れからも歩み行く、こういう人が実には珍重さるべきであるのでしよう」と書いている。

会場には五十号の「長春郊外」以下西公園、長垂海岸、馬渡島等々スケッチの旅の成果二十余点と、坂本

小杉の賛助出品作が並んだ。

後援会の尽力で出品作は完売した。

まだ戦後色が濃く絵どころではない

時期だったが、平嶋の穏やかな画風

は人々の心に優しく響いたのであろう。

「この個展が終わると父はめっきり老いて来ました。長い人生の疲労がどっと出て来たのでしよう」と大

神敏子さんは言う。

同年秋、画友坂本繁二郎は文化

勲章に輝いた。平嶋は翌三十二年二月、西日本新聞に記事がのったが、

結局、画業が特に脚光を浴びることもなく、その四月十六日、七十八歳で世を去った。

今日、城南区田島の平嶋家(二男・故賢二氏宅)に十余点の油彩が残されている。玉屋個展に並びきらなかった作品であろうか。柳川、背振など各地風景がありスケッチの旅の範囲がしのばれる。大連市楓町の自宅付近の景が一点、戦後の自画像が一点含まれている。

いづれも奇をてらわぬ構図、穏やかな色調、巧まぬ詩情があふれ、心静かな画境が思われる。まさに精進で築いた画技である。

個展の売れ先リストが残っており、他

の作品の行方を探すがかりがないだけに、十余点の作品は平嶋信の絵画の一端を物語る貴重な品々である。私は、多々羅義雄の縁で、能古博物館に一度並べてもらえないかと思う。あるいは多々羅の作品と共に師弟展も楽しいのではないか。実現を切望している。

●筆者紹介

谷口治達氏

九州造形短期大学教授・美術評論家連

盟会員・当館専門委員



作品「戦傷癒えて」前の平嶋 信

博物館学芸員実習レポート

平成3年7/11~7/31

西南学院大学文学部  
境陽子

姪浜からフェリーで十分、緑に囲まれた静かな能古博物館で私達の実習は始まりました。

実習の内容は、主に講義とグループワークでした。大学では聞くことができないような彫刻や絵の話などいろいろな分野にわたって、おもしろいお話を聞くことができました。

クでは取材のために能古島を歩いてまわりましたが、たくさんの方々が親切に説明してくださり本当に助かりました。私達の班はグループワー



各班の成果



グループワークの発表会

クの合間をぬって能古島に窯を構えておられる神田さんの「今古窯」にもお邪魔して、実際にろくろを扱わせていただくという貴重な体験をしました。初めてろくろを扱う私達に神田さんは熱心に指導してくださいました。悪戦苦闘しながらも何とか無事、お茶碗らしきものを仕上げることができました。大切に使うと思っています。

私はグループワークを通して能古島の多くの方々とお知り合いになることができました。

また、この実習で、自分の生活を見直す機会を与えられたような気がします。ありがとうございます。

西南学院大学文学部  
榎記代美

榎記代美

この実習で、学

芸員の心得や文化財の取り扱いについて学ぶだけでなく、福岡の歴史や文化についても学ぶことができました。私は、能古博物館を訪れるまで、亀井学や能古焼、五ヶ浦廻船などについて何も知りませんでした。

福岡は板付遺跡や太宰府、鴻臚館、元寇防塁など歴史的に重要で、しかも全国的にも有名な史跡の多い所です。しかし福岡藩のお膝元で近世学問、芸術、産業が開花し、それが近代に影響していることを認識し、まだまだ福岡の歴史や文化を勉強しなければならぬと思いました。

また、福岡市美術館を見学し、収蔵庫など展示会を支えている裏の部分を実際目で見ることで感激しました。観覧者の知らないところで作品の収集や保存のために細やかな注意を払っている学芸員の苦勞を



本館前にて記念撮影

知ることができました。グループワークで私達の班は五ヶ浦廻船の歴史についてのレポートを作成しましたが、その時は「観覧者向け」というのを頭に入れて書くようにしました。でも割と難しく、今までは気づかなかったのですが、ぜひ分検討したうえでまとめられているのだと思います。

- 田代晶子さん・榎記代美さん
- 岡崎淳子さん・井手朋子さん
- 岩津直子さん・境陽子さん
- 松井清子さん・日隈友紀さん
- 財津千帆さん・佐々木宗子さん
- 川崎哉子さん・井原理子さん
- 柳尚輝くん

十三名の皆さんお疲れさまでした。今後の活躍をお祈りしています。

●次ページの記事は、以上実習生のグループワークの一つを当誌に掲載するにあたって編集しなおしたものです。

伊能忠敬が能古島に来た?

『同九日 晴天、両手一同六ツ後姪浜宿出立、同所より乗船、残島測、我等、坂部は直に今宿へ行く、今泉尾形、箱田・佐助・善蔵、筑前国早良郡残島字江ノ口人家前より初め、右山に測る、字西浦・字白鳥崎・字カントン鼻・字荒崎鼻にて両手白測一里五丁五十一間五尺、永井・浜谷・保木・善七、残島字江ノ口人家前より手分、左山に測り、字城ヶ崎・字北浦・字荒崎鼻にて両手合測、一里三丁五十五間五尺五寸、残島一周、二里九丁四十七間四尺五寸、』

以上は伊能忠敬の『測量日記』からの抜粋である。伊能忠敬一行は能古島を測量していたのであった。文化九年(一八一二)八月九日のこと。伊能忠敬一行は、この島の測量を

伊能忠敬能古測量絵図



約一八〇年前の忠敬一行と同じ行程を歩いてたどり感動しました。館内に「伊

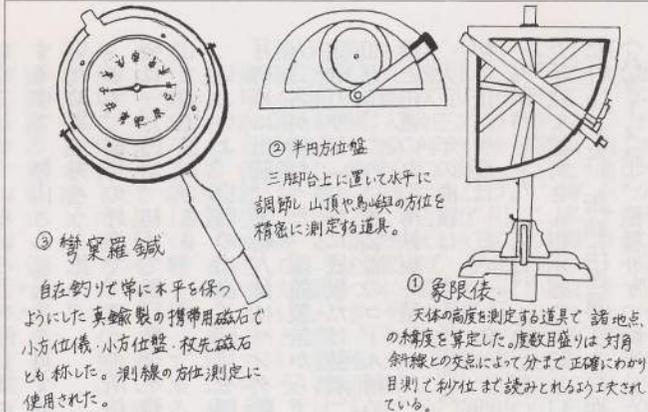
日帰りで行ったが、その測量は極めて正確であったようだ。測量日記の『残島一周一里九丁四十七間四尺五寸』は現在のメートル法になおせば、約八・九キロメートル。現在は約十キロメートルとされているため、その差は約一・八キロメートル。新開の干拓によって面積が増したことを考えると、かなり正確な数字である。

また、明治以降「伊能図」に替わり三角測量によって新しい地図が完成。さらにその後、空中写真測量によって日本列島の海岸線を測量。すると意外にも「伊能図」の方が、三角測量法による地図より正確な海岸線を描き出している。

正確できめ細やかな測量によって精密な日本地図を作った伊能忠敬とその一行が、約百八十年前にこの能古島に上陸し、測量していた事実を知ってほしい。

- 測量の前触れと隊員の様子
- 忠敬測量隊が文化六年九州測量を実施するにあたり、測量予定地の各宿駅、村の年寄、名主、組頭らに、次のような幕府御誓文の写しを添えて協力要請の先触れを出している。
- ・人足八人、馬七疋、馬持運搬人夫若干を揃えること
  - ・各庄屋は村絵図を持って案内すること
  - ・測量器具据込み地を用意しておくこと
  - ・一行十八人の宿は余り分散しないこと
  - ・宿賃は定額を払うから一汁一菜の他ご馳走してはならぬこと
  - ・尚、この先触れ書は、順送りに先々へ伝達、肥後熊本へ留置き、我々が着いたときに返すこと
- 天草史料によると、一行の服装は股引、草鞋がけであった。酒も飲まず、夜間、観測や製図などをするので、夜食を出しても食べなかつたが菓子だけは食べた。
- あとがき
- 約一八〇年前の忠敬一行と同じ行程を歩いてたどり感動しました。館内に「伊

伊能忠敬 測量道具あれこれ



能図」の模写が展示してありますので是非皆さんご覧いただきたい。

最後に、伊能忠敬の測量隊が能古島に来たことは事実であるが、忠敬自身がこの島に来たかどうかは定かではない。

C班柳・井手・財津・日隈・松井

(一九九一年七月三十一日)

参考文献『伊能忠敬測量日記』九州ふるさと文庫刊行会

原題「真翁聞きがき」

# 真翁銅像ものがたり

(八)

- ・ 伍 詰 開 始
- ・ 三 井 取 引 始 め
- ・ 会 社 設 立
- ・ 新 漁 区 拡 張

大正三年(1914)。ぼくのオハラ漁区は明治四十一年の日露漁業協約発効から、すでに露領漁区の租借契約六年の実績になる。

協約細目により漁区租借期間は、初回契約は必ず一年、二回から三年租借が可能、通算六年を経て長期五年を認める。漁区にも地形など利便実効良否があり事業者のために短長期選択を認めた制度である。

かねて研究をつづけたサケ缶づくりに、漁区に多額の設備投資が必要になる。このため漁区の長期契約は絶対である。幸いに今年から、その資格ができています。

二月初、ウラジオストクで予定通り長期租借の契約を完了。帰国を東京廻りにした。頭山満先生は留守。杉山茂丸さんは好都合。いきなり、樽新から君のサケを貰ったよ。なかなかのもんだね、で驚く。そこでいまサケ缶を思案中ですと話した。

それなら三井物産を使うことだよ。今夜は泊まれ。明日、紹介するよ。

杉山さんの話は、いつも早い。

結局、三井物産の海外駐在が長くいま物産系の南陽貿易社長の檀野礼助氏から、今年はもう現地据付けの製缶機は、間に合わないと思います。

函館製缶に、すぐ発注し出漁前本年使用の缶をつくらせる。現地で中身を詰め合わせ、水煮とし、缶蓋をロール締めとハンダ付け、さらに缶ごと殺菌煮沸後、通気孔にハンダする方法(輻付式と呼び簡易な缶詰製法である)で、おやりなさい。

また、製品は八ダース(一ダース十二缶)を一函に、この荷ごしらえは、函館の三井物産営業所にお任せ下さい。

サケの経験はありませんが、マグロ缶の輸出は相当に扱いました。要は魚肉の切り口をキレイにすること。缶蓋を取ると中身の魚肉が、丸太をスパッと切断し良材の年輪が美しく見えるよう缶丸に合わせ詰める。くず身は決してまぜないこと。これを徹底して現場指導を願います、と

熱心に話された。

まるで樽新さんが、新巻サケの製法を、ぼくに命じられたと同じである。食品製法にも名人芸に徹することを叩きこまれた思いである。

今年の製品が良ければ、以後は物産が鉄板から機械までお世話します。最新の製缶機械は、現地に自家発電が必要で、生産量が設備投資との経済バランスになります。どうか、しっかり気を抜かずにおやりなさい。すべて、ぼくに異存ない。

檀野さんの豊かな経験と熱心な商業性をうかがうことができた。

杉山さんの紹介もあるが、信頼できる人と思った。即日、杉山邸辞去。檀野さんとは数年後、三井物産による北洋漁業進出と、サケ、マス、カニ缶詰をロンドンなどヨーロッパに、塩蔵品は主に上海、大連港から支那大陸に直輸出される業績をつくられ、再会の奇縁を得るが、この時はお互い予想もできなかったのである。

函館帰着、さらに驚いたことは、檀野さんの手配で缶蓋のロール手廻し機と蓋材、これに空缶発注を出漁に間に合わず指示が物産駐在社員の小林君から聞かされた。また、函館製缶が三井系であることもわかった。小林君はなんでも言うて下さい。一

生懸命やります、と。まるで、ぼくの使用人になった態度である。

空缶発注は、二十万缶。三月末完納させます。支払いは漁期後にしておりますという。きつと杉山さんが、ぼくの退去後に檀野さんに気くばりされたと思う。いま一つ、驚いたことは、去年の大阪高利貸し一件が、すべて杉山さん御承知であったことである。思うに、頼光の決断は、ぼくのことを、いろいろ手を廻し調査する中で、杉山さんに伝手を得て聞いた結果であろうと思う。

さて、前年の好漁で、ぼくの所持金は一万円余、初めて銀行預金を残しての出漁ができる。

いよいよ、自前の出漁二回目を四月初めに航。乗船人員にハンダ職人二名が加わった。函館製缶から予定通り空缶(丸筒に底板だけ装着)20万缶、これに蓋装着のロール締め機と缶蓋の丸型薄鉄板を積込んだ。

大正三年の漁獲は、まず平年並み、初の缶詰生産は、紅六十、銀サケ四十%割合にした。中身は、水講で習った手法で檀野さん指示通りの切り口に仕上げた。缶詰生産量千五百函(八ダース詰)。漁獲サケの約半分とマス全量は従来(の塩仕込みにした。残念ながら缶詰のため、新巻サケの

生産は手不足で及ばず、となった。ハンダ職人が手不足である。

頭山先生にサケ缶三函、杉山さんに二函を発送した。(二函は九六缶入り) 幸い三井物産の品評は、まず良。

出漁中の六月、オーストラリア皇太子暗殺によるセルビアとの戦争が、両国に同盟と支援関係にある独、露

戦争となり、さらに仏、英、伊、米が対独参戦、これに日英同盟によりわが国まで独逸に宣戦布告。世にい

う第一次世界大戦である。これはサケ缶に軍用需要が加わったと、予定

の六十%高値で三井物産から支払いがあった。十二月、かねて考えていた会社設立を「ベリング漁業株式

会社・資本金十万円・払込資本金は二万五千元」とし、すべて完了した。

樽新さんの紹介で交際が始まった平塚氏から、いざ北洋漁業大合同

が実現する。君に、まとめ役になってほしいと要望された。人に勧める

以上は、自ら実行することであるが、もう少し漁区拡張したい。来年は、カムチャッカ半島の東海岸(ベリ

ング海)に漁区入札の予定である。そのため社名であるので、暫く期間をくれ、と答えた。

先輩である。これに並ぶのが長州財閥の久原房之助を背景にした日魯漁業がある。同社は、大合同の核として、ぼくも参加する大舞台になる。

世界大戦は、日露戦争以後とく不振がつづいていた日本経済に活況を呼び引き金になった。

日露戦争は、勝利をおさめながら戦中の消耗経済による落ち込みが続いていた。わずかに北洋漁業の好漁場を得たが、その生産経済で全国を潤すまでに至らず、残念である。

そのためには、従来の北洋漁業が塩蔵本位の低価産品からヨーロッパ輸出に向く缶詰生産で外貨獲得と国内産業にも貢献する事業規模にすることが痛感される。

現状の北洋露領漁業は、契約漁区数二三〇、事業者九十三名で事業規模は平均二・五漁区、缶詰生産者は僅かに八事業者に過ぎない。

なお、露領漁区は予定区三一〇に未契約漁区八〇。これは地理的、地形等の状況もあるが、その開発利用工夫を積極的にする必要がある。

ぼく自身、漁区数一、缶詰生産は着手したばかりである……資本なく、全く徒手空拳、青年客気による開拓精神での出発であるが、まずは

零細事業ながら成功している。これから自己実験による成果を公

開的にし、大合同と新規参入の増加に努める自信と自覚を得たと思う。

函館を中心とする、ぼくの世間評を小林青年が語ってくれた。曰く、真藤網元は若い、北洋漁業以前は満州の義賊で、ロシヤ通の外交官川上俊彦にすすめられて露領事業に進出。また、玄洋社の頭山満が後援者である、と。

川上さんのこと以外は、少々間違っているが、あえて弁明する必要はない。ただ、満州義軍が満州義賊に

できれば賊の字だけは除きたいがこんなことは釈明すると、なお悪いと考えた。すべて時の流れに任す。

多くの事務所に、頭山先生の「運と辛抱」を掲額している。

これからも初心忘れずにやる。大正四年、東海岸のナラチェフ漁区を入札、契約を得た。素晴らしい

漁場である。いままでも出願がなかったのが不思議とされる。

この年は、北洋の当り年とされている。まさにその通りであった。

オバラ漁区も昨年の四〇%増の成果である。缶詰はハンダ職人を四人にし、三千二百函を造った。同業者

で缶詰着手を考え、視察が多い。遠慮なく漁区を開放し、自由に見せ、質問には実績で答えた。

東海岸の新漁区は、初漁であるがオバラの倍に近い漁獲をあげた。

カムチャッカ州の首都ペトロパウブスク、前面がアワーチャ湾、なんとなく福岡と博多湾に似た地形である。新漁場は、この湾から東北に百

軒、ナラチェフ川の北三軒で東面がベリリング海に沿う。南隣に露人専用漁区が河口に近く位置する。こうした露人漁区は、季節にサケ大群が河口を塞ぐ勢いで寄りつき、海面も河水面も盛りあげる。露人漁業者は

漁獲を現地渡しで売りたいという。来年から缶詰生産をするので考えてもよいと答える。また、来年は必要な雑貨など欲しい物を持って来ると言うと言喜んで品目をいう。若い娘を漁場に同行しているので化粧品、石けんなども欲しい、と。

新漁区の裏手に、遠くナラチェフ湖を水源にする本流からの分流がある。川幅一五メートルに過ぎないが、これにもサケ群が押し寄せる。このため漁区の沿海漁の外に、この川漁は天与とされる。

なお、カムチャッカ半島東海岸は、オバラの西海岸に比べ気候的に穏やかである。これがベリリング海沿岸漁区を選んだ大きな事由である。

(本稿は次号で完結します)

●筆者紹介 庄野寿人 勸亀陽文庫理事長

読者のコーナー

◎たぐさんのお手紙を頂きましたので、その中から紙面の許す限りご紹介させていただきます。

○毎号送っていただきありがとうございます。今号も楽しく読ませていただきました。特に安陪光正さんの『能古博物館を訪ねて』を読み、小生、またもや能古に行きたい衝動に駆られてしまいました。

実は昨年来、果たしてない約束の一つが、「一緒に能古に行こう」という愚妻との約束であります。小生が能古で触れることのできた自然の素晴らしさや、素朴な人間模様を話すやいなや愚妻は「わたしも行きたい」を繰り返すばかり。しかし、なかなか暇がとれず、今日まで彼女は能古知らず、という次第であります。それで、送っていただいた『能古博

物館だより』を読んだり地図で場所を確かめたりして行ける日を待ち望んでいる様子です。

能古の魅力とは何でしょうか？能古は確かに独特の雰囲気があります。浜からフェリーに乗るときあのウキウキした気分。まるで子供に戻ったような気持ちになります。あれはいい感じではないでしょうか。そして新鮮なサラダを盛りつけたような能古が近づくと、果てしなく遠いところまで来たような錯覚をします。島に着くと対岸の喧騒から完全に遮断されていてタイムマシンに乗ったようです。

小生にとって能古はアジール、つまり避難場所のような気がします。街の生活に疲れたとき、能古にすれば不思議と心が和みます。名も知らぬ草花が、ぐんと近くに感じられま

す。海風の囁き声が聞こえます。海の色も、浜浜から見るのとは全く違います。

能古は人々を暖かく迎え入れてくれます。玄界灘の厳しさや、自然の限らない優しさを兼ね備えた島だと思えます。そんな能古に、今年の夏は愚妻と行けそうです。

小郡市 沢田絢夏

○安陪先生の「能古博物館を訪ねて」を読み、酷暑続きの中、一陣の風に見舞われたような爽やかさを覚えました。と申しますのも、私も犬（アファン雌三才名前はリョウ）を飼っています。もう家族の一員で、リョウとはよく話し、私共の食事はインスタントですませてもリョウには手をかけたものをやります。そんな有様です。先生とフィル君との愛と信頼の関係がぐっと胸にきてペンを執りました。能古探訪のご様子が眼にかびます。

福岡市 田上紀子

【福岡市】板木継生様・木戸祥子様・速水忠兵衛様【粕屋郡】鶴田実和子様【甘木市】田中トクエ様【山田市】藤浦とし子様【熊本県】河上洋子様【フランス】原新吾様

ほかの皆様よりお手紙をいただきました。ありがとうございます。

図書受贈

○菰口治氏より／西村天囚・菰口治校注「九州の儒者たち」

○青木繁樹氏より／青木繁樹著「あの町・この町歴史・探訪」

○後藤新治氏より／E・H・ゴンブリッチ著・下村耕史、後藤新治、浦上雅司訳「芸術と進歩」

○米倉清氏より／草文書林「紫水」第12号

○神奈川大学日本常民文化研究所より／「民貝マンスリー」第23・24巻

○姪浜川柳会より／会誌88・89号

○田部光子氏より／瀬木慎一著「美術経済白書」

この場を借りてお礼申し上げます。

能古自然を歩く会参加者募集

歩く会のシーズンです。海と森の能古を歩いてひと巡り。爽やかな汗をかいたあとは楽しい昼食をはさんで充実した講座。有意義な一日に参加なさいませんか。

■決行 11月9日(土)・24日(日)・12月8日(日)

■参加費 会員 800円(同伴一名まで)  
(食事付) 一般 1,300円(入館料含む)

■申込み方法 各回5日前までに電話にてお申込みください。☎883-2881・7 能古博物館「歩く会係」※詳細はお気軽にお尋ね下さい。

化儼草(えびね) 俳句会能古島吟行

ホトトギス同人

永田 蘇水 選

湧くと云ふ動きの見えて峰雲に

蘇水

石棺の跡をとどめて蟻の塔

しづ子

樹下涼し万葉歌碑に石棺に

とし子

欠けつづく石棺さびし風の萩

和子

樹下涼し防人歌碑に遠潮音

朱実

檀旧居儼の匂ひを覗きたる

恵美

磯の香の一步に島の蟬しぐれ

ふみ子

檀旧居島に老鶯啼くばかり

公恵

老鶯にしばし思索の歩を止めて

和子

松蟬と万葉歌碑の中にあて

みちえ

文字摺の彩よきことも島ならば

登喜子

旧居はや蟬しぐるるにまかせあり

順子

七月十一日

於能古博物館研修室

けいしゅう  
閨秀 亀井少槩伝 (十) 庄野寿人

父娘同居、夫妻平戸旅行、父昭陽病む

文政四年(一八二一)。少槩は結婚五年目に入る。まだ子供に恵まれない。まわりも本人たちも、そろそろ気をもむ頃合いである。

夫君雷首と井原村の新居生活がそのままつづいており、夫の医業も亀井家のかかわりが多く、少槩も父昭陽の著述助手として実家に泊りこむことが多い。松原と田園を縫う平坦な12軒の行程であるが夜道ともなれば、若い兩人にも不安がある。

少槩の弟義一郎は十七才に成長、蓬洲と号し盛んに詩作をして少槩に添削(詩文に手直しすること)を求めながら、自説と理屈を主張するが、少槩はあまり取り合わない。

次弟の鉄次郎(後の陽洲)十四才、家塾で書生と机を並べ修業中である。父はじめ家族全員が最も気にかけているのは、長男義一郎が十二才の時に左足骨折し、その後遺症で歩行に不自由が見られることである。それでも本人は父の藩公務に代理が許される場合は健気に勤めており、これが少槩には痛ましく思われる。いま父は四十九才。以前から五十

才で義一郎に家督を継がせ、隠居後は家塾と著述に専念するという父を考えると少槩は切なくなる。もしも義一郎の家督が不可となり、鉄次郎相続になれば父の隠居は四年先になる。しかし最近の父は以前に増して著述に励み、これは少槩の資料照合と稿本浄書を忙しくしている。

二月十三日、雷首夫妻は亀井家に移り住むことにした。これは前々から話し合われていたようで「空石日記」の記事に昭陽書齋の部屋替え、本箱、書棚の移動を日記にするが、その事情の記入がなく、いきなり次の記事になる。

十三日、塾は臨時休講。早朝、儀助(鉛屋と呼ぶ)が手伝いに走り込んで曰く、源吾君を一走り出迎えに行きます、と。大声を発して走り出た。妻は弁当ごしらえ、余(昭陽自身のこと)は、山人(少槩婿、雷首山人のこと)移り来るに歓迎の儀式を行うべし。諸子、御参会を願うと次第を書き、塾生には士琅(内書生の古参)に托す。義一郎にも同文で近隣各家に廻る。

次で、士琅と献叔(対馬藩士で肥前田代領の在勤)を先に、下男の弥七に弁当を担わせ、これに与八を付き添わせ、山人の引越し一行を途中に迎えて昼食をさせるのである。

幸いに雨が上がり、晴れとなる。士琅らは生ノ松原で茶店を借り待機する。献叔だけは、なお道を先に進み、朝一番に走り出た儀助が引き返すのに出会う。儀助は、いま源吾君の行列は今宿に小休止、まもなくこちらに見えますと知らせる。献叔は、ほどなく山人と移転荷物を運ぶ一団に接近し、出迎えの挨拶を述べ、用意の茶店に一行を案内し、持参の弁当を開き、移転の宰配者(山人の兄)はじめ玄尚、敬蔵、道太郎、醬油屋清次、鍵屋只七、碧蟬らに中食を供した。頃合を見て、士琅だけが先に出て、百道(亀井家のこと)に戻り昭陽に状況を報告する。

この士琅による第一報で、世と宗(少槩の二、三妹)と末弟の修三郎(五才)が揃って藤崎(亀井家から唐津街道を西に一・五軒の地点)に出迎える。

やがて、第二報は藤崎から弥七が走り戻って一行の進行を伝える。すぐ義一郎と鉄次郎が弥七に新しい木履三足を持たせ途中の出迎えに向う。

(註) 〓この新しい木履三足は故事によるものか、単に移転先に新しい履物で儀礼的な気くばりをさせたものか、未詳である。

やがて三報が献叔によって、まもなく到着と伝える。これで妻と少槩が門に出て待つ。また、塾生の士琅と亀六、道意は、玄関式台の両側に二人と一人に分かれて座し、迎える。主公(昭陽のこと)は、玄関からつづく奥座敷に端然と座して待つ。

昭陽は、今日のすべてが己れの予定通りに整然と進められたことに深い満足を得ていたと思われる。

まもなく、玄関に控えていた貞助(内書生)が到着した山人を案内、昭陽に對面着座させる。

正堂に、慰斗鮑を昭陽が山人を列座させて供える。床の掛軸は「君子万年永錫祚胤」の八字一行、昭陽書である。この、君子万年。永錫祚胤の句は、中国古典の詩経・大雅篇に出る。句意は、有徳の人「君子」に、天は万年の寿を与え、後孫に永く幸を及ぼす、とする。

聖像(孔子像)に香を焚き、昭陽は山人がわが家に入る祝福を祈拝する。次いで山人も拝し、長子義一郎も拝を同じくさせた。供進の神酒を祭壇から下げ、昭陽から山人、次に列席する書生達にも盃を廻しながら

能古博物館だより

祝詞を述べさせ、式事を終えた。聖像を書斎の厨子(仏像などを安置する向とびらのついた飾り屋形)に移す。この後は、全員無礼講の大宴会となり、みな飲み倒れて止む、と。

以上は昭陽手記「空石日記」の原漢文をそのまま訳したものであるが、やや滑稽に思われるところもある。

しかし昭陽が少栗と婿の雷首山人を同居家族として迎え入れた自身の歓喜を生真面目に、儀式に表現した行事である。素直に昭陽の気持を受け入れることにしたい。

この日の「空石日記」記事は、平日が三五行、まれに十行程度にすべて簡潔にされるのに二十一行という異例の長文である。

この頃になると、藩の南冥処罰による連累として亀井家にも制約的な監視が次第に緩和していた。これは昭陽による謹直と自戒、儒者職を認められず平土に組替えられて課される下級士の勤務もよく果し、所属の城代組々頭衣非氏に篤い信頼を得る。これらが少栗結婚と夫雷首の家族判(士籍身分を得る)承認など、衣非組頭の計らいは既述の通りである。

雷首は、生地井原村の好音亭を解いて百道の亀井家地内に移築、夫婦の住まいにした。父昭陽は、この好音亭が気に入る、時々己れの書机を

移し共用するなど日記にしている。

九月十二日。昭陽は組頭役宅に向く。月俸券の受取りである。昭陽に藩支給の扶持は十五人扶持(一人扶持は一日米五合で計算される)、日当り七升五合で、その月の実日数(大の月は三十日、小は二十九日)分を米切手で支給。これを昭陽は月俸券と呼ぶ。最近、義一郎が代理で受取りに出ている。この月は昭陽が出頭し受給を得ると、組頭衣非氏に面会を願う。要件は『山人の平戸藩生月島の診療旅行に、同人妻の少栗を同伴するための藩許(女性の藩外旅行は特別許可が必要)を得る』にあった。証明を得て、当夜は両人のため家族全員で別宴を催した。

九月十三日、山人は、毎年平戸藩生月島・益富家の定例診察(現代の定期検診と保健薬方の調合)に、少栗同伴で出発した。初めての夫婦旅行である。従僕の久八を供に薬籠(医療具と薬などを入れる)と少栗らの着替え行李を両掛けに担(な)ねせる。

益富氏は、西海捕鯨王と呼ばれ、祖父南冥の師である永富独嘯庵の医術信頼に始まり、これを南冥、雷首に相伝する。また当主先代から代々の同家子弟は亀井塾に就学がつづく。徂徠学の認識者であった。今年の少栗同行は、前年の雷首出張に明年同

龜陽文庫・能古博物館友の会

- (福岡市) 天谷千香子②、西嶋洋子②、岡部六弥太②、笠井徳三②、坂田泰滋②、鬼塚義弘②、村上靖朝②、片倉静江②、星野万里子②、桑形シズエ②、速水忠兵衛②、小田一郎②、亀井准輔②、三好恭嗣②、吉村雪江②、財部一雄②、重松義輝②、橋本敏夫②、田上紀子②、古野開也②、三宅碧子②、安松勇一②、上田良一②、高田浩二②、近江福雄②、片岡洋一②、桑野次男②、山内重太郎②、星野金子②、石川文一②、木戸龍一②、中畑孝信②、森藤芳枝②、金江たま子②、中村紀彦②、西川真澄②、岡本金蔵②、青柳繁樹②、黒川邦彦②、荻原ヨネ②、片桐寛子②、西村忠行②、岩重二郎②、玉置貞正②、西島道子②、宮微男②、原重則②、石橋七郎②、上田博、大神敏子、横山智一②、末松仙太郎②、藤木充子②、板木継生②、吉原湖水②、和田慎治②、池上澄子②、江口博美、宮崎和子、山口孝一、今村嘉代子、安藤光保、池田邦夫、野間フキ浦上、健宮崎集、都筑久馬、柳山美多恵、柴野美智恵、鹿毛義勝、村上昭子、吉村陽子、斎藤拓、安部利行、久芳幸子、長正彦、久保喜蔵、吉田澄彰、鍋山駿一、石橋鏡一、那須博、桃崎悦子、江島寿人、鬼木善夫、岩下須美子、吉長秀子、安永友儀、土屋正直、山口朱美、磯崎啓子、大庭祥生、森真吾、森岡栄、三角健市、織田喜代治

- 伊奈義之、甲本総太、渡辺俊江、岸洋子、大串梓、林十九楼、古賀清子、前田静子、田中和子、(大野城市) 伊藤泰輔②、田代直輝②、大西節子、(春日市) 後藤和子、(筑紫野市) 横溝清②、脇山涌一郎②、川浪由紀子②、原富子②、西村国典、(太宰府市) 石田秀利②、中村ひろえ②、古賀謹②、有吉林之助②、佐々木謙②、吉田泰山子②、平岡浩、西尾弘子、(筑紫郡) 荒井昇②、与那利三郎②、西村久夫②、添田耕造②、結城慎也②、(粕屋郡) 斎藤良一②、神崎憲五郎②、榎田正己②、榎田猶子②、酒井俊寿②、青木良之助、安武房子、松本雄一郎、(宗像市) 大島成晃②、原田国雄、木村秀明、(甘木市) 佐野至②、酒川カツヨ②、具嶋菊乃②、宮崎春夫②、井手太②、井上清②、田中トクエ、富田英寿、床島静、(糸島郡) 由比章祐②、(柳川市) 庄野陽一、(八女市) 松延茂②、(大牟田市) 嶽村魁②、古賀義朗、杉原守、(苅田町) 木下勤②、(鞍手郡) 久保田正夫②、(飯塚市) 小山元治②、(久留米市) 野田正明②、(浮羽郡) 吉瀬宗雄、(北九州市) 平野敏②、片桐三郎②、知足久美子、石垣善治、(佐賀県) 甲本達也②、掘田和子、(熊本県) 浜北哲郎②、(山口県) 大塚博久、平野尊識、(大阪府) 小山富夫②、大橋孝太郎②、(滋賀県) 小堀定泰②、(愛知県) 豊杉浦五郎、庄野健次、(神奈川県) 中野晶子

伴を懇望されていたのである。

少柴ら出発後の十五日、昭陽は日記に「天雨而凄然、感風寒」と記す。(天雨ものすこく、風寒きを感じず)

この夜から昭陽は発病する。

十六日、夜の会講を病のため休講する。翌十七日は朝講、午も休む。

十八日、病のため全休講。昭陽は終夜不眠に苦悩する。

十九日、大いに発汗、そのためか熱は下る。不眠前夜の如し、と。

二十日、書生一同、大鱸を見舞いにくれる。隊伍会(城代組士の班編成、昭陽は長を勤める)休む。

症状は熱がつづきふるいが止まらず病状悪化し毎夜ふるいが甚しくなる。

医師は南冥に学んだ生民(博多に開業)で、長く昭陽の主治医的存在で昭陽も信頼。生民は病気の主因を確認できないでいる。

(この間、日記記事あるも、省略する)

二十八日、夜、山人友也及久七、生月より帰着。又、ふるいが出る。

二十九日、生民来診。日々見舞客が多い。塾は書生達の総意で当二分休講とする。(見舞者氏名と見舞品目など日記記載あるも省略、昭陽病状経過のみ掲記する)

三十日、この日、夜ふるいやむ。

十月一日、生民、その助手大生と互いに朝夕交替で昭陽病床に就く。

夜は駒太郎(昭陽妹婿の山口白貴の長男で甥に当る。学問秀才で昭陽嘱望の青年)が看護に就く。

二日、ふるいなし。前日から尿量を計る。前日四合二勺。本日四合五勺。この尿量記録は「小水〇升〇合〇勺」として日記の始めに記す。

(三、四、五日の記事省略)

六日、小水七合二勺。ふるいやまず、衰弱が進む。

七日、小水九合、敬(少柴次妹で母実家の「五島屋」早船家に嫁ぐ)見舞いに来る。

八日、小水一升一合四勺。

九日、小水一升六合一勺。

以後、十二月十二日まで七十一日間、日々の小水(尿)量記録つづくが十一月下旬から病状軽快に向う。

十二月五日、周易朝講卒業、以後礼記特別講を始める。尿一升二合

六日、山人が鯛を獲る(地引き網によるか)。四日に妻が末子修三郎と姪浜実家婦り二泊して帰る。

少柴同居で母に余暇が生じている。尿七合二勺。

七日尿九合八勺。八日尿一升五勺。

九日、朝、気が屈していたが講義中に頗る快になる。中食後に睡眠、夜間に起き内則を閲す。尿九合七勺。

少柴にも父の健康回復が見える。(以下次号)

- (東京都)・片桐 淳二②・山根貞与②
  - (千葉 県)・森 久②・宮 城 県
  - 田中 信彦②・(北海道)・船越谷嘉一
- ②会費は御継続のしるす。

【協賛会会員(個人)】

- 片桐 寛子(福岡)②・緒方 益男(佐賀)②
- 中村 登福(岡)②・中山 重夫(佐賀)②
- 西村 俊隆(東京)②・大里 豊男(福岡)②
- 梅田 光治(福岡)②・広瀬 忠(福岡)②
- 今林 昇(福岡)②・大久保津智夫(嘉穂)②
- 永田 蘇水(福岡)②・大坪 正治(福岡)②
- 野口 一雄(福岡)②・伊藤茂(芦屋市)②
- 立石武泰(福岡)②②・木原 敬吉(福岡)②
- 菅 直登(福岡)②・奥村 宏直(福岡)②
- 村上 五一(福岡)②・七熊 澄子(福岡)②
- 多々羅幸男(千葉)・早船 正雄(福岡)②
- 七熊 太郎(長崎)・床野 直彦(直方)
- 七熊 正(長崎)・安陪 光正(福岡)

【協賛会会員(法人)】

- 福岡流通警備保障(株)・村上五一(福岡)
- タイム社印刷(株)・安部栄一(福岡)
- 株 笠 組・笠 忠夫(福岡)
- 博多ちくわ・株魚嘉・松尾嘉助(福岡)
- 権藤 税 理 事 務 所・権藤成文(福岡)
- 協 通 配 送 (株)・今林 昇(福岡)
- 大 牟 田 運 送 (株)・南誠次郎(福岡)
- 山 谷 運 送 (有)・山谷悦也(東京)
- 株三島設計事務所・三島庄一(福岡)
- 西尾トラック運送(株)・西尾秀明(福岡)
- 日 西 物 流 (株)・原 重則(福岡)

- 愛宕建設工業(株)・野村六郎(福岡)
- 九州三菱ふそう自販(株)・宮崎慶一(福岡)
- (有)愛光ビルサービス・野田和禧(福岡)
- (有)クリーン開発・野田和禧(福岡)

※新規の御加入(先号以後、十月十三日

まで)は、右の地区ごとに記載いたしておりますので、何卒御芳名を御確認下さい。ありがとうございます。

友の会 年間3千円

(館の活動、館誌購読と催事企画に参加) 自然と文化の小天地創造

能古博物館の会

協賛会(個人) 年間1万円  
〃 (法人) 年間3万円

【館維持、資料収集、施設整備等の資金援助を受ける】

納入方法 郵便振替 福岡3160970

財団法人 能古博物館

右の会費受領は、その都度本誌に掲載以後会費相当期間を名簿にします。

【お願い】ご送金は振替用紙(送料加入者負担)をご利用下さい。用紙はご連絡次第お送りします。

当博物館の活動、また絵画・古文書資料など当館に皆様の支援をお寄せ下さい。

## 少栗自題画・東都展を飾る

本年八月三日〜九月八日・東京都板橋区立美術館の開催「江戸の閨秀画家展」に、亀井少栗作品三点が、

作家六十一名、その作品一二一点の中でとくに高評を得た、と。同館主任学芸員安村敏信氏の九月十九日来館による談話である。同展は、日本経済新聞に同氏の寄稿が掲載され、全国に反響があり、その中で当館訪問の連絡となつて、当方も情報を得る好機会と期待していた。なお同氏は、同展企画のため資料収集中に東京古美術商で、ずいぶんと元氣のよい菊図一幅を目にした。大輪のヒマワリを思わせる筆勢のよい菊花で、作者は亀井少栗という福岡の女性と

いう。これが氏の少栗作品に初の出会いである。

「結局、福岡市博物館で二点の少栗作を加え、計三点を展示した。市博物館で、亀陽文庫のことを聞いたが、まだ少栗作品に認識が足らず会期には全くアトのまつりとなる後悔を痛感した。」当館で少栗自題画から書跡、写本類まで展開しながらの応答であった。同展で、九州は亀井少栗が唯一で、観客の注目を集め、さらに女流らしからぬ活潑な作柄が好評になったと、くりかえされた。

また、同展を見られた埼玉県志木市の「冬青社」主宰の坂本守正さんという方から、「蘭画自題」少栗作に最も心打たれた、として

「群葉を右から左斜め下に鋭く横切る名刀一閃の牙え、下方の叢から湾曲して伸びた一葉の凛然たる張り」と述べられ、「少栗は『漢文学者総覧』に、

玉蘭、細香らとともに漢詩人として登載総数約五千のうち女流は十指に満たない。亀井少栗は、その輝ける晴天の星……」と、賞賛をよせられた。

次は、自分のことになるが、多年少栗作を目にしたせいとか、一つの馴れが生じている。以上の高評に目覚めさせられるものがある。

最近、わかつて来たことを述べる。少栗は、文人画の要件である自題詩に、同一詩がないという事実。とかく文人、南画家には同一詩を重複して使う例が見られる。多作で知られる日田の五岳作にこれが多い。

また、自題の詩作が得意でない直入、耕石には南画の大家にされながら基本の学力不足のため短句四字程度を冠した作品を多く見受ける。

これに比べ、少栗は、季節、図柄、寓意を自在に五、七言絶句とし、同一詩を使わないのである。

因みに、東京展の菊図、蘭石図の図録写真掲げ、題詩の訓読を付しておく

## 「菊図」

病懶不栽菊 病みつかれ菊を栽す  
重陽徒永歎 重陽いたずらに永歎す  
把杯無所醉 杯を把って返杯するなし  
自画一枝看 自ら一枝を画き看るのみ

## 「蘭石図」

伊昔盛人佩 これ昔文人の心にとめるもの  
国香芬滿庭 国の香、満庭に芬る  
秋来家醸美 秋来れば家に美を醸す  
花畔独何醒 花の畔独り何ぞ醒すや

なお、東都女流展の画題は四君子「梅、蘭、竹、菊」図が多く三二点、山水図二四、桜花七で全展の半数を占め、次で花鳥、浮世絵、狩野派等は女性絵師、文人と半数を分つ。

## 編集後記

巻頭文では多々羅義雄の師平嶋信について知ることができた。平嶋は青木繁と親交があるなど美術史上にも顔を出す人である。彼の遺族を通じ平嶋・多々羅師弟のその素顔を垣間見、新鮮な気持ちで再び多々羅常設展示室に立ってみた。

## ・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)  
休館日 毎週月曜  
(月曜が祝日の場合は次の日)  
12月29日~1月2日  
入館料 大人300円・中高生200円  
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)  
→能古(徒歩5分)→博物館  
〒819 福岡市西区能古522-2  
☎(092) 883-2881・2887  
FAX(092) 883-2881



少栗「蘭石図」墨画淡彩  
121.5×50.8  
福岡市博物館蔵



少栗「菊図」墨画  
116.8×27.9